

『静かなる大恐慌』

経済学部准教授 柴山桂太

タイトルだけを見れば、よくある恐慌本（「大恐慌がやってくる！」）の一種と受け取られるかもしれない。だが、本書のメッセージはそれほど単純ではない。確かに今の世界的な経済危機は深刻だ。リーマンショックに始まり、欧州債務危機、そして新興国の成長鈍化と、世界経済はまだしばらく不安定な状況が続くだろう。

私が考えたかったのは、その先である。この経済危機のあとで、世界で何が起きるのか。経済と政治、そして国際関係の話題を絡めつつ本書で取り組んだのは、そうした歴史の予測である。

本書ではそれを、いくつかの側面に分けて考察した。通貨戦争、国内政治の混乱（先進国における民主主義の危機や、新興国における政情不安）、また地政学的対立（とりわけ中東と東アジアで起きる対立）など、さまざまだ。その内容は、経済学部で行っている「経済社会学」の講義で、この数年、話していることと重なっている。

一つだけ確認しておくとして、世界がリーマンショック以前の世界に戻ることは、もうありそうにない、ということである。過去のグローバル化がそうであったように、現在の巨大な経済危機は、歴史のモードを変えてしまう。グローバル化が進み世界経済が統合されていくという時代から、各国の経済主権が強化される時代——「脱グローバル化」の時代へと、歴史の潮目が変わりつつあるのだ。

そうすると、何か悲観的な未来を描いているように思われるかもしれない。それは半分正しく、半分間違っている。

グローバル化から脱グローバル化への転換は、確かに過去においては悲劇をもたらした。本書ではそれを、戦前の「第一次グローバル化」の失敗として紹介している。これは最近の経済史研究で盛んに研究されているテーマだ。グローバル化は、最近になって始まったものではなく、歴史上、何度も現れては崩壊している。一九世紀末から二〇世紀前半にかけての世界は、現在と同様、貿易や投資によって各国が経済的な結びつきを強めた時代であった。だが戦前のグローバル化は決して長続きしなかった。恐慌と二度の戦争によって、世界は分裂の方向に向

かったからである。世界史の教科書で習うように、この時の分裂は第二次大戦から米ソの冷戦と、五〇年以上も続いたのだった。

本書で強調したかったのは、今後、世界は新たな脱グローバル化の時代を迎えるだろう、ということだ。そして、それ以上に強調したかったのは、脱グローバル化は決して暗い世界に行き着くとは限らない——少なくとも、恐慌から戦争へという戦前の道を再び歩むと決まっているわけではない、ということだ。ではどんな道があるのか。詳しくは本書の後半をお読み頂きたい。

もちろん、未来は誰も分からない。だから本書で描いた未来予想も、蓋を開ければ大きく間違っていたという可能性もある。しかし、それでいいのだと思う。社会科学は、それが「科学」である以上、仮説によって現実を説明するだけでなく、その仮説に基づいて未来を予測する責務がある。予測が外れたなら、もともなった仮説が間違っていたわけだから、廃棄するなり修正するなり、あるいはまったく別の仮説に置きかえればよい。社会科学とは、そうした地味な試行錯誤によって正しい仮説へと近づこうとする試みである。

では、二度目のグローバル化はどんな結末を迎えるのだろうか。本書の仮説が正しいものであるかは、今後の歴史が教えてくれるだろう。

